



末日聖徒イエス・キリスト教会の
会員として、さびしく感じる
ことがありました。でも、ほかに
も同じように感じている子が
いるかもしれないとは思いま
せんでした。
「わたしの親は、意地悪をする
人は心の中で幸せを感じてい
ないからそうするんだって言
っているわ」とメーガンは言
って、鉛筆を指でぐるぐる回
しました。「ベネットは悲しい
気持ちをしているんじゃない
かな。それか、ひとりぼちな
のかも。」
タージは頭をかたむけまし
た。「きっとそうだよ。友達
がほしいのかもね。」
メーガンはにっこり笑いま
した。

「友達二人必要かもね！」
次の日の自習時間、メーガ
ンとタージはベネットが一人
でテーブルにすわっているの
を見ました。
「やあ、ベネット」と、ター
ジが言いました。
ベネットはおどろいた様子
でした。
「やあ。」
「何をしているの？」メーガ
ンはそうたずねながら、椅子
にすわりました。
「れきしだよ。」
「明日の小テスト用？」ター
ジもこしを下げました。
「そうだよ」とベネットは言
いました。
「覚えることがたくさんある
よね」とタージが言います。
ベネットはうなずきました。
「問題を出し合うのもいい
かもね。」

メーガンはれきしの教科書を
開きました。3人はチャイム
が鳴るまで、順番に問題を出
しては答えました。
立ち上がって帰ろうとした
とき、「メーガン、昨日はごめ
ん」とベネットが言いました。
「きみの教会のことを少し聞
いたから、興味があったんだ。」
ベネットは体を前後にゆらし
ていました。「ぼくはちがう
ことを信じているけど、もっと
親切にするべきだったよ。」
メーガンはにっこりしました。
「ありがとう。わたしの教会
はわたしにとって大切だけ
ど、信じているものがちが
っていても大丈夫よ。」
「ちがう信仰を持っていても、
ぼくたちは良い学習グルー
プになれると思うよ」とター
ジが言いました。
ベネットはにっこり笑いま
した。「ぼくもだよ。そして、
ぼくたちは小テストでとて
もいい点を取れると思うよ。」
●
このお話は、アメリカ合衆国
での出来事です。

ちがっていても一人じゃない

ジュリアン・テニー・ドーマン
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)
ジリリリン！ その日最後の授業
のチャイムです。メーガンは今、
中学生で、いろんな授業に出
ています。そして、勉強する
ことがたくさんあります。メ
ーガンは最後の授業が自習
の時間によかったと思いま
した。宿題に取りかかれる
からです。
メーガンがだれもないテー
ブルにすわると、ベネット
という男の子がやってきました。
「ねえ、メーガンってモル
モンだよ？」
「わたしは末日聖徒イエス・
キリスト教会の会員なの」と、
メーガンは言いました。

「じゃあ、ジョセフ・スミス
がモルモン書とかいう本を書
いたと思ってるんだね？」と
ベネットはたずねました。
メーガンは、どう答えれば
よいかを知るために、すば
やく心の中でいりました。そ
して、「ジョセフ・スミスは
モルモン書をほんやくした
のよ」と言いました。「キ
リストの教会をふたたび設
立するのを助ける人として、
神様がジョセフ・スミスを
預言者にめされたの。」
ベネットは鼻にしわをよせ
て、「変なの」と言うのと、
笑いながら行ってしまいま
した。
メーガンは顔が熱くなりました。
うつむいて教科書をじっと
見ていました。
「ねえ、メーガン。」

今度は何？ メーガンは顔を
上げました。「ああ、こんに
ちは、タージ。」
「ベネットのこと、いやだ
ったよね」とタージは言
いました。タージはメーガ
ンの向かい側にすわりました。
「きみが言っていたことは、
きみにとって大切なこと
なんだなって思ったよ。」
「ありがとう」とメーガ
ンは言いました。「そのと
おりなの。」
「ぼくはきみの気持ちが分
かるつもりだよ」とター
ジは言います。「学校で
ビーンズ教徒はほくだけだ
からね。自分が信じている
ことをほかの人たちが理
解しようとしてくれないの
はつらいよね。」
メーガンは時々、学校で
たった一人



教会員が自分だけで、
さびしいときもありました。

